

# 理想の医師像と重なる 人に寄り添う心を育む環境

1941年の建学以来、「人間形成と大学進学」を教育目標に掲げる城北中学校・高等学校は、すぐれた人間性を備え、広い教養と高い専門性を育む教育を行っている。医学部進学を意識した進路指導を積極的に働きかけてきたわけではないが、発的に毎年多くの医学部進学者が出る背景にはいったい何があるのだろうか。

## 教育のムリ・ムダ・ムラをなくし トータルな学習時間を確保

医学部に特化したコースがないにもかかわらず、毎年コンスタントに医学部進学者を送り出しているのが城北中学校・高等学校だ。とはいえ、2019年度入試までの合格者は圧倒的に既卒者が多かった。ここ



高3の夏期講習は80近くもの講座を開講。講義ののちに実験を行う講座も開設された



るが、近年は現役合格者が増え始め、2021年度入試ではとうとう国立、私立ともに逆転。医学部への現役合格者が既卒者を上回った。「特別な指導や誘導をしてきたわけではないのですが、毎年40名ほどの生徒が医学部を志望します」と話すのは、進路指導部長の加門康徳先生だ。医学部志望者を増やそうという意図的な作爲はなく、生徒の希望をかなえるために他の志望と同様に受験対策は支援してきたという。「高3の時期には旧帝大向け、医学部向けなど志望別の対応はしてききました。医学部の理科は難易度が高いわけではありませんが、問題量が多いので時間内に量をこなす練習が必要だからです。また、小論文対策は国語科の教員が対応し、ウエイトの大きい面接も私たちがなりに資料を集めて指導してきました」



進路指導部長  
加門 康徳 先生

さらに、理科では「知らないことを調べ尽くす」ことを方針に、生物では観察、比較、考察を重視し、物理や化学の実験では、レポートの作成で論理的思考力を養っている。「データのまとめ方を徹底し、グラフもどう利用するか考えさせ、結果に誤差が出た場合もその原因を追究するよう指導しています」

## 医学部受験専門予備校との 提携をスタート

塾を利用せずとも、できる限り学校の学びで完結させたいという方針のもとで、学校での自習をサポートし、すべての生徒に面接を年に数回行うなどいいねいな指導を心がけて実績を積上げてきたが、実は昨年度から医学部専門予備校との提携をスタートさせたそうだ。希望者を募ってのセミナーで、医学部入試のポイントについての説明や模擬面接を行っている。

「医学部に特化した予備校の情報量は

やはり豊富です。医師を志望する者の心得、テストの点が取れればいわけではない理由など説得力をもって語ってもらえます。『裕福ではないけれど医学部に進学できるか』という生徒の質問にも具体的に答えてもらえ、とても好評でした」

しかし、受験の心得や受験勉強以上に同校が注力してきたのが、「人に寄り添う心」を育てることだ。LHR（ロングホームルーム）ではSNS上のトラブルなど社会や校内で課題となっているような問題を取り上げ、度々話し合う。いじめは絶対に許さず、人権侵害であることなどを説きながら、徹底的に指導する。

「本校の生徒は基本的にやさしい。自分の受験が終わっても、まだ終わっていない友人と一緒に勉強を続けるなど思いやりのある生徒が多いんです。社会で活躍するにしても人を押しのけてではなく、共に成長できる人になってほしいと思っています」と加門先生は話す。特別に医学部受験を意識しているわけではないというが、目指す人物像は社会で求められる医師像と重なる。



本年から音楽選択の授業では、ヴァイオリンが必修となった

